

## 乳幼児健診における心理相談員の役割

研究協力者：川井 尚

### 要旨

乳幼児健診において、心や発達の問題がクローズアップされ、その対応が迫られている現在、心理相談員の果たす役割は重要といえよう。しかしながら、従来他の健診スタッフの専門領域と比較し、心理の役割が不明確であったり、あるいは理解しにくい点があったことは否定できない。そのためスタッフとの連携がとりにくく、心理一任となったり、ケースの抱え込みや孤立を招く一因ともなっている。

そこで乳幼児健診における心理相談員の役割を明確にすることを目的に、1) 心理相談員の対応しうる領域、2) 健診スタッフとの連携、3) ケースカンファレンスの3点について論述した。

見出し語：心理相談員の役割、発達と情緒的問題、スタッフの連携、ケースカンファレンス

### 目的

乳幼児健診が疾病、異常の早期発見、早期治療から広義における乳幼児の心身の健康、いわゆるポジティブヘルス、或いはウエルビーイングへとその重点が移ってきている。これに連動するように子どもの心の発達や健康がクローズアップされ、さらに育児不安や小児虐待に代表される母親の心の健康にも目がいきその対応が健診における大きな課題となった。

そこで健診における各専門領域の中で、特に心理相談員に対しその役割を果たすことが期待されることは当然のことといえよう。ところで小児科医等医療職や保健婦、栄養士などの専門職についてはその役割が明確で他のスタッフから程度の問題はあるにしても理解されやすく、従って役割分担もチームワークももちやすい。

しかしながら、心理職はこの職種の持つ本来の性質にもあずかって、心の発達や健康問題に

対応するという事は理解できても、それでは何をどうするのか具体的な役割が見えにくい。その結果心のことは心理相談員にお任せということになるか、何をしているのか分からないということになりやすく、役割分担もチームワークもとりにくいということになる。そのために心理相談員がケースを抱え込んでしまったり、孤立を招く一因になりやすい。

乳幼児健診は子どものそして親の心身の健康を総合的に見ることに意義があり、心理相談員もそのような健診の一翼を担うことがなくてはならない。そこで本報告では健診における心理相談員の果たすべき役割をできる限り明確にし、健診スタッフの理解を得ることを期待したい。このことが結局は健診を効果的にし母と子の利益につながると考える。

以下の論述は心理相談員にとって、必要不可欠な専門的知識と技術、そして臨床経験を持っていないといけないという望ましい姿を示したものであり、現在の心理相談員が全てかくあるというのではない。

#### 1. 心理相談員が対応しうる領域

その領域は大きくふたつにわけられる。ひとつは発達の領域であり、もうひとつは情緒的問題に代表される心の領域である。

a) 発達領域：さまざまな程度の精神発達遅滞、言語発達遅滞、小児自閉症そして最近注目されている学習障害（以前は微細脳機能障害とされていたものとする）、あるいは環境要因に大きく依拠する発達の遅れがこの領域にはいる。心理相談員は精神発達に関する理論を熟知

していること、発達診断技術、これには的確な行動観察と生育、生活史の把握、発達検査の習熟が要求される。更に最も重要なことは乳幼児を実際によく知っていること、乳幼児心理臨床の経験が不可欠である。しかし乳幼児の臨床経験のある心理相談員は多くいないことが現実であり大きな課題といえる。

加えて、発達は生物学的要因に大きく依拠しているため身体についての知識も重要であり、特に神経学的発達とその障害についての知識をケースに即して身につけておかなければならない。その上で小児科医、できれば小児神経の専門医との連携が必要となる。ここで特記すべきことは発達の最終診断は心理相談員ではなく、専門医の役割であるということである。行動観察、生育史、発達検査の結果などを診断に役立ててもらえるよう所見を書き、あるいは話し合うことが重要である。心理相談員は神経学的異常を疑い得るだけの知識を持ち、専門医にリファーする役割がある。

心理相談員の独自の役割をあげれば、発達上の問題をもつ子どもは、そのハンデキャップの故に心の痛手を受けやすく、しかもそれに対処する事が難しいため、より心の問題を持ちやすいところにある。従って、その心のケアと母親の苦悩を和らげること、育てていくための、そして発達促進的環境をつくりだしていくための相談の仕事がある。情緒的問題をもつ子どもと同様、プレイセラピーと母親面接のスキルが要求される。

b) 情緒的問題の領域：はじめに情緒的問題

とは何かについて概説しておく心理相談員の役割を説明しやすい。情緒的問題の元を質せばその発生源は不安、恐怖にある。青年期以降であれば不安神経症、対人恐怖症など各種恐怖症、形を変えて強迫神経症などいわゆる精神神経症といわれるものである。しかし幼児期ではパーソナリティの発達段階のためこれらの明確な形を取らず、以下のような状態を示すことになる。

1. 自立して後の夜尿
2. 昼間遺尿と頻尿
3. 遺糞
4. 指しゃぶりと爪かみ
5. チック
6. ロッキング、ヘッドバンギング
7. 髪の毛いじり
8. 脱毛
9. 抜毛
10. 性器いじり
11. 自傷
12. 夜驚
13. 唇かみ、唇なめ、唇吸い
14. タオル、ぬいぐるみを離さない
15. 母親から離れられない
16. こわがり
17. 極度の人見知り
18. 登園をいやがる
19. 友だち遊びができない
20. 家以外では話さない
21. 極度の乱暴(攻撃的)
22. かんしゃく。

これらが代表的な危機信号であり、子どものプレイセラピーと母親相談が必要である。また、身体と心の相互関係から生じる小児心身症もこの相互性に不安、恐怖が関与し身体化したものといえよう。

ところで、不安、恐怖に遭遇することなく人は本来生きることはいかない。そこで問題は不安、恐怖を体験したときにいかに対処し鎮静化することができるかにある。この問題に最も効果的に働くものが母子関係であり、この関係の基本的機能は「安全性」にある。いわば安全基地ともいべき母子関係のはたらきによって、不安、恐怖を解消するといつてよい。

乳幼児健診の場で、プレイルームがなければ

プレイのコーナーをつくり子どもと遊び(プレイセラピー)且つ母親との面接をすることになる。その対応のポイントは前述の母子関係の機能、即ち安全性のある関係をつくりだすための相談にある。

なお、小児心身症の場合、心理相談員だけで対応してはならない。その発症要因はともあれ身体症状は現存するのであるから小児科医と心理相談員が組んでみていくことになる。このときの相談の心得として心理相談員は心を通して身体を、小児科医は身体を通して心を見ろというイメージをもってあたることよい。このようであればまさに心と身体をまるごとみることになる。

## 2. 健診スタッフとの連携

これまで小児科医との連携について多少ふれたが、子どもは日常の生活の中で発達していくことを考えると、その生活が子どもにとって発達の環境にないとき他のスタッフとの連携が必要となる。栄養上の問題も単にカロリーや栄養素のみでなく、食事行動そのものから考えねばならないことがあり、栄養士に相談することを勧める。当然母子保健上のこともあり、保健婦の相談が必要となる。

母親自ら望んでという場合もあるが、多くは小児科医など健診スタッフから心理相談員を紹介され来談している。そこで逆に、援助すべき領域が見られれば、心理から健診スタッフに相談に行くように勧めることが望ましい。母親にとって、多くの専門家がよくなり、相談にのってもらいよかったという印象をもってもらうこと

は、健診目的を最も効果的に果たすことになる。

心理相談員の基本的な役割は発達をみ、その上で発達援助をはかること、そして心理療法といわれる相談にある。しかし、人は心だけで存在するものでないということを心理相談員は当たり前のことではあるが忘れてはならない。心と身体、そして何より日常の生活の中に人は存在している。

健診は子どもを中心に母（親）と子の心と身体、生活をみ、援助しうる絶好の場であり、それには心理相談員の役割から少し余分に行動し、他の専門スタッフと重複、共有しうるところが母と子に総合的に関わる援助を可能にするといえよう。

### 3. ケースカンファレンス

ケースカンファレンスの究極の目的は母と子の利益にあることに間違いはない。この目的を果たすためにケースに関与した各専門スタッフが、その専門領域での見解と援助について述べ、更に他のスタッフの意見を聞き、あるいは依頼することになる。ここで特に心理の領域は目に見えない、説明しにくい側面があるので、専門用語に頼らず分かりやすく話すことが肝要である。健診スタッフに理解されなければ、面接のとき母親に理解できるはずはないという当たり前のことを心理相談員は心得としたい。そこで、このようなカンファレンスをもてれば、各専門的役割と共有する役割の相互理解がなされ、総合健診の効果が期待できる。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨

乳幼児健診において、心や発達の問題がクローズアップされ、その対応が迫られている現在、心理相談員の果たす役割は重要といえよう。しかしながら、従来他の健診スタッフの専門領域と比較し、心理の役割が不明確であったり、あるいは理解しにくい点があったことは否定できない。そのためスタッフとの連携がとりにくく、心理一任となったり、ケースの抱え込みや孤立を招く一因ともなっている。

そこで乳幼児健診における心理相談員の役割を明確にすることを目的に、1)心理相談員の対応しうる領域、2)健診スタッフとの連携、3)ケースカンファレンスの3点について論述した。